

其角年譜詩稿(四)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2012-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今泉, 準一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/12202

其角年譜試稿(四)

今泉準一

元禄四年(一六九二) 辛未(八月閏)

三十一歳

夏○四月 路通江戸を発つ。別れの日、路通・普船・仙化・溪石と五吟歌仙一卷(『勸進牒』「いてや空」の巻)。

○四月二十五日 芭蕉の『嵯峨日記』に其角の作品あり。資料篇四七。

○四月二十八日 鋤立編『誹諧六歌仙』発句一入集。資料篇四八。

○五月 『猿蓑』序文を認む。注五九。

×五月 村田忠庵の悼句を乞わる(『猿蓑』)。

○五月のことか、芭蕉、大津より去来に手紙し、「此木戸や」の其角の句の板木訂正の指示あり(『去来抄』)。

○六月十六日序 琴風編『瓜作』発句七入集。資料篇四九。

○六月晦日 肅山・彫棠の帰国の名残とて、一夜、彫棠と両吟歌仙一卷(『雑談集』「桐のはや」の巻)。

秋○七月朔日 肅山・彫棠と三ツ物三(『雑談集』)。

○七月十五日 肅山・彫棠、京に到り、信徳および上京中の路通と半歌仙、これに其角付句す(『雑談集』)。

○七月刊 『猿蓑』序文・発句二五入集。資料篇五〇。

○七月刊記 友琴編『色杉原』発句一入集。資料篇五一。

○八月五日刊 轍土編『我が庵』発句一・連句一入集。資料篇五二。

○八月十二・三日ごろから同十八・九日まで岩翁・亀翁父子、且水・尺草・横几・遠水・未陌と大山・榎島より鎌倉へ小旅行（『雑談集』）。

×八月十八日 仙化・普船と三吟歌仙（『雑談集』「川つらに」の巻）。

○七・八月ごろ 江戸勤番の許六は其角を訪ね、「信濃路や蝸にすはるゝ瘦法師」の批評を乞うた（尾形「芭蕉と許六」『芭蕉研究』第二輯）。注六〇。

○八月二十五日刊 好春編『新花鳥』発句一・三ツ物一入集。資料篇五三。

○八月二十六日刊 北枝編『卯辰集』発句六入集。資料篇五四。

○八月二十六日刊 路通編『勸進牒』発句一三・文章一・歌仙五入集。資料篇五五。

×閏八月四日

君看心水道入腸と申句をこ

しやくなる禅坊のかけられ

たる答に

腸をぬかれてつよし秋鯉（『小松原』）

心水とは後に親交。注六一。

○閏八月十五日 江水編『柏原集』発句一入集。資料篇五六。

○閏八月中旬刊記 只丸編『小松原』発句七入集。資料篇五七。

○閏八月二十日刊 賀子編『はすの実』発句一入集。資料篇五八。

○閏八月二十五日付 智海宛其角書簡。資料篇五九。

○このころ村山万三郎（歌舞伎役者）没す。悼句あり（右書簡・他）。

○九月 立志の弟子立吟（小野川檢校）都へ上るとて、これに餞けの一句あり（『餞別五百韻』）。

○九月十六日刊 立志編『餞別五百韻』発句一入集。資料篇六〇。

×九月 岩翁亭で岩翁・亀翁・且水・横几・未陌・探泉・尺草・芒風・岩泉・遠水と日待を修す。燭寸百韻一卷あり（『雑談集』）。

△大津の尚白、撰集の志を伝え来る。これを祝って句を送る。注六二。

○九月二十一日刊 文十編『よるひる』発句二入集。資料篇六一。

○九月二十三日 中尾・浜宛芭蕉書簡に其角が「集」（多分『雑談集』のことであろう）を編む予定のことを報じてきた由を記す（『校本芭蕉全集』「書簡編」）。

冬×大坂の鞆士と文通あり（『雑談集』）。

○肅山・彫業江戸にふたたび戻る。これと三吟歌仙（『雑談集』「うつついで」の巻）。

○十月 支考の「東海の紀行」に「こと海道より此道は、騷人の詞のたね多し。しかるに古人の枕を今物めかしくつぎておもしろき節く、富士の生れの色もかくれまじく末たのもし。」の一文を書き添えた（『六花追悼集』）。（石川真

弘編『蕉門俳人年譜集』「宝井其角年譜」）。

○十一月十八日 中尾・浜宛芭蕉書簡に、其角が集を編むので、中尾（槐市）・浜（式之）に作品を芭蕉宛に送るよう報ず（『校本芭蕉全集』「書簡編」）。

○十一月十一日刊 ノ松編『西の雲』発句一・歌仙一入集。資料編六二。

○十一月十三日 曲水宛芭蕉書簡に「其角に逢申、先御噂申出し候」とある（『校本芭蕉全集』「書簡篇」）。

○亀翁の元服を祝って支考とともに句あり（『流川集』）。

△支考を加えて、岩翁・沾徳・遠水・横几と六歌仙（『流川集』「浅漬に」の巻）。

○十二月のある日 芭蕉と唱和の句あり。

住捨し幻住庵にはいかな

る句をかのこされけんそ

れはそれさて世の中をう

けたまはるに

妖まなから孤貧しき師走哉 其角

かくれけり師走の海カイツブリの鴉カイツブリ翁

『口』か光『』

×「火鉢の記」成る（『雑談集』）。

×能楽師沾蓬と閑談、両吟歌仙（『雑談集』「黒塚の」の巻）。

×遠水・岩翁と三吟歌仙（『雑談集』「やふれても」の巻）。

×普船と両吟歌仙（『雑談集』「薄氷」の巻）。

×『花摘』の清書などさせた其角直系の弟子山川・かしくに溪石を加えて表六句（『雑談集』「凧よ」の巻）。

×露沾と付句（『雑談集』）。

×其角の発句に枳風脇（『雑談集』）。

△水木辰之助（歌舞伎役者）の槍踊り、大評判。

辰之助に申遣す

煤払や諸人かまねる槍おとり

水木辰之助後に其角の弟子となる

（『歌舞伎年代記』）

○十二月十九日 其角俳文・俳諧集『雑談集』成る。刊行は翌五年二月（阿誰軒）。文三〇余・発句四八・連句一三入

集。

△年末か 宛先不明其角書簡。注六三。資料篇六三。

注五九 石川真弘『蕉門俳人年譜集』に

○五月、『猿蓑』の序文を認め、去来・凡兆の許へ送る。本書序文の執筆は、芭蕉の指示によるものか。なお、この頃迄に『猿蓑文集』の出版中止を決定する。『横平楽』は、その経緯について「猿蓑文集の下書、洛去来の筆、一冊、是はさるみの撰らるゝ時、文章共加入すべきに極り候得共、其角か未来記、尚白が送^ル越人^ニ序、文章あしきによりむなく止になる。」と伝える。『横平楽』（綿屋文庫）には五老先生より雲茶店へ附属し給ふ品（略）

一 猿蓑文集の下書洛去来の筆一冊

是はさるみの撰らるゝ時文章共加入すべきに極り候得共其角か未来記尚白が送^ル越人^ニ序文章あしきによりむなく止になる
其後先生本朝文選編集の時去来より来たる所也

とある。これによると、其角の「未来記」と題する一文が『猿蓑』編集者去来・凡兆に送られ、去来が保管、許六が『本朝文選』編集の際、許六の手に渡ったことが知られる。其角の「未来記」と題する文がどのようなものかは不明であるが、資料篇三五はその参考となるか。

注六〇 尾形「芭蕉と許六」『芭蕉研究』第二輯の考証によれば、『五老文集』の

ことし六月の末に北海道を下りしころ（略）此峠を上ルに善光寺へ詣つる法師はらの背にのみしく蠅の取つきたるをみて

信濃路や蠅にすはるゝ瘦法師

此句江戸にて其角にかたりければ秀逸として感じ侍ける

とあるのは、元禄四年六月下旬の南向時のことで、其角との対面は同年七・八月のころとする。また嵐雪とも面識があり、其角との対面は二度（『俳諧問答』「自讃之論」）。一方翌年元禄五年の春ごろ、其角撰『花摘』の筆写を終え、其角に傾倒、これを通じて蕉風の消化に努力していたことが知られる、とする。

注六一 『末若葉』には

戯賦一絶呈几右

愛君滑稽一時毫 雁字帯レ霞入ニ彩毫

想見梅花門裏月 不レ知誰与ニ定ニ推敲

心水道人稿

応和句 たゞく時よき月
見たりんめの門

其角

とある。心水は『小松原』の記述および『末若葉』のこの記述（心水の戯詩「知らズ誰トトモニカ推敲ヲ定メン」などは雪簀の頌古に見られる禪僧特有の言い方である）などから見て禪僧ではないかと思われる。『末若葉』発刊ごろから其角の俳友となつたらしい。心水の名は調和系の俳書に見え『洗朱』『忍摺』、また其角の撰集では『末若葉』『焦尾琴』『類柑子』に見る。もともとは調和系の俳人として俳諧に親しんでいた人であつたものが『末若葉』時代ごろから其角に近づくようになった人と思われる。

注六二 『忘梅』の序文に

（略）武蔵野の遠きさかひまでほの句はせけるに

わすれ梅忘れぬ人の便り哉

と其角何か許より云をこせたり（略）

とあり、この序文の作者名が千那となつてゐるが、芭蕉の代作であることはすでに指摘されている（『古典俳文学大系』「芭蕉集」他）。一方尚白の追善集『夕顔の歌』（享保七年序）の千那序に

（略）あるとき集を撰はむとて（略）忘梅と題す（略）この梅武蔵野の遠き境までほの句はせけるに、わすれ梅わすれぬ人のたよ

り哉と其角何某か許より云をこせたり(略)

とあり、其角がこの句を『忘悔』編集を祝って送ったことは芭蕉の序文代作の件とは別にしても事実と考えてよい。

注六三 『俳文芸の研究』(井本農「博士古稀記念論文集刊行会編」に「其角書簡三通」と題して発表したものの中の一通で、その後読み誤りを二箇所発見、資料篇にはこれを訂正して記した。宛先不明であるが、恐らく弟子などうちの誰かが其角にその作品の点を依頼、その余白に書き込んで返信したものの其角の手跡の部分だけを表装し、これが今日に残ったものと思われる。文中の其角の句により元禄四年の年末のものとして推定。

資料篇

四七 『嵯峨日記』(四月二十五日の項)

乙州来りて武江の咄并燭五分俳諧一卷其内に

半 俗 の 膏 薬 入 は 懐 に

白 井 の 峠 馬 そ か し こ き 其角

腰 の 簀 に 狂 は す る 月

野 分 より 流 人 に 渡 ス 小 屋 一 同

宇 津 の 山 女 に 夜 着 を 借 て 寝 る

偽 せ め て ゆ る す 精 進 同

(『校本芭蕉全集』)

四八 『俳諧六歌仙』

拜大成殿

聖 堂 に 拱 く 蝶 の た も と かな 其角

(酒竹文庫)

四九 『瓜作』

餅 花 や 灯 立 て 壁 の 影 其角

寝 心 や 火 燵 ふ と ん の 醒 ぬ う ち

頰啼や此曉にほとゝぎす
むかし誰雪の舞台の日の気色
磨して木賊に消るあられ哉
蝙蝠は物書ちらす羽色哉
夏の夜は寝ぬに疝氣の発りけり

(国会図書館本)

五〇『猿蓑』

普其角序

誹諧の集つくる事古今にわたりて此道のおもて起へき時なれや幻術の第一としてその句に魂の入されはゆめにゆめみるに似たるへし
久しく世にとゝまり長く人にうつりて不変の変をしらしむ五徳はいふに及はず心をこらすへきたしなみなり彼西行上人の骨にて人を
作りたてゝ声はわれたる笛を吹やうになん侍ると申されける人には成て侍れども五の声のわかれざるは反魂の法のをろそかに侍にや
されはたましゐの入たらはアイウエヲよくひゝきていかならん吟声も出ぬへし誹諧に魂の入たらむにこそとて我翁行脚のころ伊賀
越しける山中にて猿に小褌を着せて誹諧の神を入たまひければたちまち断腸のおもひを叫ひけむあたに懼るへき幻術なりこれを元と
して此集をつくりたて猿みのは名付申されける是か序もその心をとりの魂を合せて去来凡兆のほしけなるにまかせて書

元禄辛未歳五月下弦

あれ聞けと時雨来る夜の鐘の声 其角

淀にて

はつしにもに何とおよるそ船の中
帰り花それにもしかん遊切レ

翁の堅田に閑居を聞て

雑水のなところならば冬こもり
寝こゝろや火燵蒲団のさめぬ内
この木戸や鎖のさゝれて冬の月
はつ雪や内に居さうな人は誰

草庵の留守をとひて

衰老は簾もあけず庵の雪

住吉奉納

夜神楽や鼻息白し面の内

弱法師我門ゆるせ餅の札

やりくれて又やさむしろ歳の暮

有明の面おこすやほとゝきす

四月八日詣慈母墓

花水にうつしかへたる茂り哉

五月三日

わたましせる家にて

屋ね葺と並てふける菖蒲哉

七十余の老医みまかりけるに弟子共こそりてなくまゝ予にいたみの句乞けるその老医いまそかりし時もさらに見しれる人にあら

六尺も力おとしや五月あめ

うとく成人につれて参宮する従者にはなむけして

みしか夜を吉次か冠者に名残哉

菊を切る跡まはらにもなかりけり

むめの木や此一筋を露のたう

百八のかねて迷ひや闇のむめ

七種や跡にうかるゝ朝からす

うすらひやわつかに咲る芹の花

臍とは松のくろさに月夜かな

うくひすや遠路なから礼かへし

白魚や海苔は下部のかい合せ

東叡山にあそぶ

小坊主や松にかくれて山さくら

〔新註猿蓑〕

五一 『色杉原』

明星や桜さためぬ山かつら 江戸 其角

(綿屋文庫写本)

五二 『我が庵』

さく花に歩きなからや小さかつき キ角

往年其角のほりしに車游に奉納の表をたのまれ幸三吟に及びて絵馬にかけぬ是を其か俳番匠に入んと契りしかいかなれば其事も
なしなつかしければこゝに挙

年こもり手水に清し松の雪 車游

池を睨せは梅匂ふ星 轍士

帰る雁とのゐの雁の声たてゝ キ角

風一とをり降出しの雨 游

酒もらぬ昨日も更におなし山 シ

網かつかせて石の瓦瀬 角

明ル月へたかる橋の涼しさよ 游

草飼なれて水に入ル馬 士

(京都大学国語国文叢書)

五三 『新花鳥』

於好春亭

おもしろき人を呼出す時雨哉 其角

花かしけたる宿の枇杷の木 好春

村雀蕪に取まく松ふりて 木村三ヶ

五四 『卯辰集』

(綿屋文庫)

日の春をさすかに鶴の歩ミ哉 其角

曙やことに桃花の鶏の声

水うてや蟬もすゝめもぬるゝ程

宵闇や霧のけしきに鳴海瀉

寒山の讚

寝る恩に門の雪はく乞食哉

いさ汲ん年の酒屋のうはたまり

(綿屋文庫)

五五

『勸進牒』

寝こゝろや火燵薄団のさめぬうち 其角

はつ霜を何とおよるそ船の中 其角

此木戸や鎖のさゝれて冬の月 其角

元日を起すやうなり節季候 其角

歳暮

やりくれて亦や寒しろとしのくれ

手握蘭口含鶏舌

ゆつり葉や口にふくみて筆始 其角

(正月廿九日月次興行通題梅)

むめ咲て人の怒の悔もあり 露沾

以下岩翁・岩泉・且水・キ翁・岩松・横几・探泉・沾荷・コ谷・沾徳の発句、そのつぎに

櫻応に侍る由その日はことに長閑にて蘭中に芳草をふみ入口面白かりけるよしうらやましさに追て加り侍る

梅の木やこのひと筋をふきのとう 其角

はなとりもうつらとならん願ひかな
やま吹は黄玉青玉露そらき

キ角

〔即座通題余寒〕とある中の一句、参加者、露沾・沾荷・キ角・岩翁・路通・且水・キ翁・乙州・コ谷・沾徳・横几）
此雨はあたゝかならん日次かな

キ角

上座ほと雛のすかたの新なり
春秋の面をこすやほとゝきす
片腕は都にのこす紅葉かな

其角
キ角

亀翁か才の美をしれば父仏見に心さしふかく母三遷の愛にあまりて視聴言動をのつから一解百句に満ぬ予ことし花摘集おもひ立て人くの句結縁となしぬ真非真是今猶恥ことさらにキ翁か才を恥て序て伏面

其角

元禄三年十二月廿五日

（以下「花摘集追加」とあつて「十四歳 亀翁」の発句、そのあと沾徳の跋文略）

俳諧連歌勸進始曲水亭

あはれしれ俊乗坊の葉喰
紙子のつきに国くの衣
借す事の面白きより金持て
日剃はげたるさかやきの色
関守に狂言見する月の影
雨かとおもふ露はばらめく
むしの音やわり木積たる軒の下
洗ふた足袋をぬすまれにけり
山伏の水をひとつともらひよる

路通
曲水
其角
里東
路通
芹花
曲水
其角
里東

よむ顔したる文のかけもの
 恋しりの猶ものよはくとしたけて
 羽織出しては又いれて置
 大橋をこさぬ中なれやかた船
 茶てもとまらずのとかはく月
 なかき夜にをりはうつ客取込て
 いくらもむしの覗くあふら火
 散花をさつとかけたるゆふだすき
 たこよくあけて子に渡すらん
 びしよくと雪間はゆるき日陰にて
 隠居屋ひとつすまふ藪医者
 鼻かめといふさへきかぬ下女か形
 かいつくはうて手のくほのぬし
 つきはつす鼠を見れば無念也
 寝着は曲に腰をうたする
 驛にはものいふ事のむつかしき
 御感の時は御簾をまきあけ
 くつさめにうちかけしたる朝の月
 馬子の千話する身の上の秋
 やゝ寒み大肌ぬきてけはう也
 居風呂桶はうつふけに干ヌ
 かたまりて何やら拾ふ雀の子
 御興へやより蛇のつら出す
 折花になかは言をかまへたり
 息災過ぎて風雅まけぬる

芹花 路通
 曲水 路通
 其角 路通
 里東 路通
 芹花 路通
 里東 路通
 其角 路通
 曲水 路通
 里東 路通
 芹花 路通
 里東 路通
 其角 路通
 曲水 路通
 里東 路通
 芹花 路通
 里東 路通
 其角 路通
 曲水 路通

さしなれていまにはなさぬ長刀
わらはぬ顔や人くはぬ鬼
筆 芹花

乙州か江戸へ起くとき

梅若菜鞠子の宿のとりよ汁
笠あたらしき春のあけほの
雲雀鳴小田の土持ころなれや
しときいはふて下されにけり
片隅に虫歯かゝえて暮の月
二階の客のたゝれたるあき
はなちやる鶉の跡は見えもせず
苗の葉延のちからなき風
発心の初にこゆる鈴鹿やま
内蔵頭かとよふ声はたれ
卯の刻の箕の手に並ふ小西方
すみきる松のしつかなりけり
萩の札すゝきのふたによみなして
雀かたよる百舌鳥の一こゑ
懐に手をあたゝむる秋の月
汐さたまらぬ外の海つら
鑑の柄に立すかりたるはなくれ
灰まきちらすからしなのあと
はるの日に仕舞てかへる経机
店屋もの喰供の手かはり
眉重きさかり衣のうそよごれ

風羅坊 乙州
風羅坊 乙州
珍碩 素男
珍碩 素男
風羅坊 乙州
風羅坊 乙州
珍碩 素男
珍碩 素男
乙州
乙州
素男
珍碩
乙州
乙州
智月
凡兆
乙州
去来
凡兆
正秀
去来
探志

恋の作絵つかふまつらせ
しつかなる杉を揮めは三輪の神
出し入やすきはやみちの銭
まきれすに返す芝居のたはこ盆
蟹の面つる家が淋しき
楽々とやはら教へて五人口
よめかぬれとも日連御書
行月の牛につけたる塩俵
松にすゝきを二方荒神
畑々の一口なすひもきとりて
かりなる物は島原の坪
あそこ爰ぬひなをしたる恋衣
二番煎しは茶のはなかなき
散花にさそふて見れど誰もこす
しきりに雉子のほろゝうつ朝

其角 路通 曲水 乙州 曲水 路通 里東 芹花 素葉 寒水 落荷 路通 飛陰
其角 路通 其角 路通 路通 其角 路通 其角 路通 路通 路通 其角 路通 其角

星赫はやきは鴯の羽音かな
網代の小屋を起す
肌あつき夜なから雨は止ぬらん
松のうすらく佐保姫の眉
七種にうち出て見よ暮の月
雉子をくゞりて送る音信
弓ふせて肩まついるゝ山おろし
なまくさき香をいとふあま御前
菊かれて仏に寄る畑一畝
路通 路通 路通 路通 路通 路通 路通 路通 路通 路通 路通 路通 路通 路通

似たりといふはくるし柿の名
いくたりも子とも集て月の影
覗よさうな竹拵子なり
宿札に仮名付したるとはれ
恋にかゝりて主とらぬほと
夕間くれ又結なをす髪曲
船路せはしき伊よの湯山
弥生には堂より西の花さかり
はるとも見えす鐘撞の俗
朝寝する人も雲雀にさそはれて
着心のよき羽織うれしき
炉路笠をさはらぬ様に片ひかき
置わすれしをよふ笛の主
行灯のふすほりぬれはたとくし
宗祇も老て旅そものうき
薄綿も重ければとて更衣
牡丹のかすは凡大名
唐様は気を尽す程よめ兼し
盗出したる徳利こそあれ
木枕の中にもなる夜半の月
もとかしやとて砧教ゆる
背を腹にいらへて逃じ萩薄
口を押へて鳴出さぬこひ
酔こゝろ亦も女房に恥かくし
玉子とるには鳥も寝てゐる

キ角 路通 彫棠 暮山 暮山 暮山 暮山
キ角 路通 彫棠 暮山 暮山 暮山 暮山
キ角 路通 彫棠 暮山 暮山 暮山 暮山
キ角 路通 彫棠 暮山 暮山 暮山 暮山
キ角 路通 彫棠 暮山 暮山 暮山 暮山
キ角 路通 彫棠 暮山 暮山 暮山 暮山
キ角 路通 彫棠 暮山 暮山 暮山 暮山

下枝は見られぬ花の懸作
やうじ落たる水の山吹

路通
彫棠

壁隣にむかへられ古風を起す

花に香のしたしみふかし薬ひとへ

蔵のならばひに巢立すゝめ子

はる風は湊の市を知行して

さもなき橋にふるき名を聞

秋の月京のあそひをふけらかす

見世の座敷のあひの菊畑

朝夕に青柚色そふ酒の中

なれさる妻の心さけすむ

跡先のちかふは夢も笑しくて

つなかなぬ船のかゝる生涯

息災て貧しき者にあやからん

一家の中へ出る椀飯

しほらしく舞にも作る百衛

絵もむせふほと霞みたる紙

住吉の岸の姫松橋そよき

わつかの煙たつる雑魚鍋

月の夜に寝かぬる鳥飛もせで

たかわすれ草うちまきし露

秋霧は西施を見たる人の情

わかるゝ迄に尽す物数寄

はなむけの無垢に色かせ鏡山

居文
枳風
扇角
路通
文鱗
扇角
居文
文鱗
居文
扇角
路通
文鱗
扇角
枳風
扇角
路通
文鱗
扇角

野 続 ぎ 広 ぎ 松 の は へ 際
 肱 枕 あ く ひ よ り ま つ 吹 嵐
 幾 日 つ な き て 米 う れ ぬ ふ ね
 蠣 む き の か ら は を の れ か 家 の ま へ
 月 に こ ころ を あ ら ふ さ か つ き
 な か き 夜 を わ か き 夫 婦 の 中 よ か れ
 新 機 時 を つ く ろ は ぬ 形
 欽 明 の む か し は 金 の 涌 け る や
 経 書 の 訓 を く ち う つ し す る
 竹 す る 響 を 朝 の 気 色 に て
 仏 に 我 か 飯 わ く る 僧
 よ ふ と き は 必 す 出 る 蟹 の 穴
 小 き 国 に 二 度 の 大 功
 花 見 し て 人 の う き 世 を わ か や か せ
 春 を 浄 め て 常 き か ぬ 香

路通 居文 枳風 文鱗 扇角 路通 居文 文鱗 扇角 居文 文鱗 扇角 路通 居文 枳風

旅 立 げ る 日 も 吟 身 や む こ と な ふ し て
 い て や 空 う の 花 ほ ど は く も る 共
 句 の 上 お も へ は る く の 旅
 似 合 鋪 親 の 帷 子 身 に 懸 て
 油 桶 に は 荷 ふ 夕 月
 午 町 の 車 休 む る 秋 の 風
 下 ら ぬ う ち に と 鯉 つ け こ む
 手 の 窠 は い や し く 喰 を う ら や み て
 あ ら 湯 に は ま つ 他 を ゐ ら す

路通 其角 普船 仙花 溪石 路通 普船 普船 仙花 溪石 路通 普船

看経に申かゝれる夜の雨
 碇静かに船ゆする灘
 髪結ぬ女は無下に見下され
 御旅の店を前渡りする
 扇折り月にせはしき植の音
 小鱒に水をかゆる堀井戸
 朝時にははつるゝとも場を踏
 老ても針の目斗はたのます
 花盛猫は身持になりにけり
 春はいつもの借座敷する
 年頭にさゝれて下る知行寺
 力をくられて落す前髪
 うつり香も黒き衣装はめにたゝぬ
 縄手をかへる遊人のかす
 飛石も樹も庵に預け置
 借蔵たつる老のたのしみ
 湖は不断たしなむ鮒の鮓
 母にはうとき三井の小法師
 禁中の御能を見るは夜をこめて
 葉施す霍乱のため
 夕月に戸渡りて行押し送り
 淡路見かけて須磨およく鹿
 雨降は塩屋にはこ蕪のから
 敷物とりには帰るかこかき
 抱キついつ袖をひかれつ市の中

仙化 仙化 仙化 仙化 仙化 仙化 仙化 仙化 仙化 仙化
 溪石 溪石 溪石 溪石 溪石 溪石 溪石 溪石 溪石 溪石
 路通 路通 路通 路通 路通 路通 路通 路通 路通 路通
 キ角 キ角 キ角 キ角 キ角 キ角 キ角 キ角 キ角 キ角
 普船 普船 普船 普船 普船 普船 普船 普船 普船 普船

湯 帽子 かふる 顔の 黒さよ 仙化
花に 酔て 餌も 喰さす 朽木盆 溪石
十日 過て も 笑ふ 山科 普船

(跋文、其角)

誹諧の面目何とくさどらんなにとく悟らんはいかいの面目はまがりなりにやつてをけ
一句勸進の功德はむねのうちの煩惱を舌の先にはらつて即心即仏とするへし句作のよしあしはまがりなりにやつてをけけにもさう
よやよけにもさうよの

元禄四年の春

狂雨堂

参考

寄其角

おもはしき木立にかゝる雪吹哉 肅山

果の朔日の朝から

節季候の来れは風雅も師走哉 風羅坊

元日を起すやうなり節季候 其角

両句に対して我も

節季候よせはしき口の覆物 路通

おなし二日に

ひとひ二日更に師走は春ちかし 同

素葉の会に其角里東その外うちむれて参りしに空のけしき曇りかちに侍れは雪待とて興にいりし

草臥て鳥行なり雪くもり 同

其角参会のとぎ

目をしやれよ花しほれたる庭など

季吟

わか檀那鮓をこのみてくはれければ

しらせはや 蓼喰虫に 鮓の味 是吉

(竹冷文庫)

五六 『柏原集』

有明の面おこすや時鳥 江戸其角

(綿屋文庫写本)

五七 『小松原』

ゆく水や何にとまらる苔の味 其角

偶興

此松にかへす風あり庭涼 其角

花火の題に

稲妻にかよひて更る花火哉 同

乞巧

橋となる鳥はいつれ夕鳥 同

田家

房ぶりを朝日にすかす稲葉哉 其角

君看心水道人腸と申句をこしやくなる禪坊主のかけられたる答に

腸をぬかれてつよし秋鏝 同

瓜市の跡は場に成躍かな 同

参考

(其角・亀翁を挙げた後)

ひと夜二子にひかれて弄松閣にあそぶ折ふし其角亀翁の句を出して懐しき事共物語するしこのころ集の事おもひ立てやます一
ならひにいさくとすめらる風狂日々の情なに事をかそむかむやとみつからは筆を馳す
はしりには葉菱のみみきりくす 路通

(早稲田大学図書館本)

五八 『はすの美』

鳩なくや此あかつきをほとゝきす 江戸其角

(綿屋文庫)

五九 閏八月廿五日付 智海宛其角書簡

贈智海状

御息災にて御着府目出度いづくも旅のやとりなから古郷と思召候てめしもうまく弥御堅行奉察候私五日酔地つゝなから返申候凡当地になまなく候キ風一家も不残つくくゝとゐ申居候路通上京申候而早勸進帳の第一板行出来申候京へ被仰付候へば拙者花つみ路通勸進帳も相調申候

まはり遠くて候本やは二条井筒屋庄兵衛と申候

良夜四ツ過清影

名月や暈の上に松の影

一 紅葉山の鳥とも徳に飽候て公方様御成之節御上下に屎しかけ申候此谷によりて鳥三千羽余八丈島へ流され申候皆羽を切つてな

かされ候清少納言の大島の例もとをかし当月十一日の事に候蘇武か旅雁の義なくうかれ申候人も聞さりければ

初雁よ御所につめたるむら鳥

とあはれみ候

近年又御杖候て江戸のさはかしき犬の屎とも御ふみ可被成候私も親につなかれ弟子衆にせめられ申し一方動きのとられぬ中にもとうやらかうやら似合にうそをつき合せ候てたのしみ申候

此間大山不動参詣申候て

腰おしやかゝる岩根の下紅葉

十八丁の岩壁を九文にてこしをおし申候いづれ親父か小便に出候手を引てさへ孝行の名は取可申候に今様の無用の骨を折申候体も

よこ雲やはなれくのそは畑

是はけしきか自慢に候

壬八月廿五日

キ角

智海師

尚々長助医道あかり申候はしかはやり申候へ共一人もころし不申候昨夜もいましむる事色に在りと申題をあて候へは
錦 木 や 色 の お は り の 老 男 是吉

御伝言有かたく奉存候由申候むら山万三郎と申やろうはしかにて相果候追善に

折 釘 に 残 る か つ ら や 秋 の 蟬

女方にてかつらかけ申候かつら御そんしにて候や

(飯田『蕉門俳人書簡集』)

六〇 『錢別五百韻』

行く月や枇杷を袋に納めけん

(国会図書館写本)

六一 『よるひる』

此人数舟なれはこそすゝみかな 江戸其角

青海やあさきに成て秋のくれ

(綿屋文庫影写本)

六二 『西の雲』

巻を乞に便りあはたしく燭五分を得てこゝに出す

鳳^イ巾^カの 廻^ウおはへて走る大路かな 横几

筋^イの 跡^カも 枝^ウを 見^エる 松 岩翁

花^イかとも 矢^カ倉^ウを 包^エむ 榎^エして 其角

洲^イ崎^カ廻^ウれは 櫓^エを 引^エし 船 路通

其^イ赤^カさ竹^ウに た^エとへ む^エ出^エる 月 遠水

た^イく^カれと 縲^ウふ 瓢^エ箆^エの 蔓^エ 几

取^イ立^カし 寺^ウは 常^エより 秋^エの 色 翁

水^イの あ^カや 漉^ウく 献^エ上^エの 紙 角

何^イ事^カも 口^ウき 者^エは 一^エ器^エ量^エ 水通

と^イる^カを と^ウむ る も 蓋^エの 興^エ 水

角入ぬ内は心をゆるされし
 妾にそらする寝間のさかやき
 二重なき思ひをぬふか袋たび
 聞ぬ顔するふるさとの伝
 念仏を申て巡る替撞の木
 薬用ゆる撰待の泡
 乗馬の月にも白き口の
 新井をこさぬ秋の暮六つ
 名観進の相撲肝煎此年
 作り紋をはつけぬ神主
 賄の妻になをれは鎰さけて
 老てもかこつ狙箸の章魚
 蠟燭の立つゝきたる家の風
 一步のかねのひとつ成いろ
 先達の勞れて籠る奥の山
 紅とてもおなし地のはな
 餌をまかぬ清水に魚の生立あふ
 風のみ払ふ琵琶橋のちり
 あれほとこの笈の中にも寝たる月
 鎌置ところさかす萩原
 見知ウつても生の替りぬる渡鳥
 ものくふうちも直さす庭
 自慢いふたはこはあらく切せたり
 泣かぬ顔にも思ひつく人
 花持て下女かおかしき前渡り

水通角翁几 水通角翁几 水通角翁几 水通角翁几 水通角翁几 水通角翁几 水通角翁几

藤のひかりをかこつ棚下 筆

西行とむさし坊とは清水かな 其角

(綿屋文庫)

六三 『宛先不明其角書簡』

残考十五句

二字二 乙字五

丸四 其角

当風と申は覚不申候和歌連伴ともに姿かはり候ても心は不易に候日くくの工案是斗の余紙には何として書つくしぬへきことに師走の半也雪の後にて手も寒し

此中の雪に

我雪とおもへはかろし笠の上

笠の雪はきつく手ふるし料理やにて候ことさらに申さは

笠へ重ッ吳天雪

此重の字ヲ敵にとりて申したる軽字にて候同し諷を能大夫の心にておもしろからする所を御工夫習候へく候

(今治市河野信一記念文化館蔵)

【附記】 其角年譜試稿(三)は明治大学人文科学研究所紀要別冊六(昭和六十一年三月二十五日発行)に記載した。